

ベロットが描いたウィーンとミュンヘンの風景画の 構図と添景の解読

松永, 一郎
福岡大学工学部

黒瀬, 重幸
福岡大学工学部

花崎, 正子
九州共立大学

趙, 世晨
九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門

他

<https://doi.org/10.15017/20644>

出版情報：都市・建築学研究. 17, pp.11-25, 2010-01-15. 九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門

バージョン：

権利関係：

ベロットが描いたウーンとミュンヘンの風景画の構図と添景の解読

Spatial Compositions and Deciphering the Foreground Elements of Landscape Paintings at Wien and Munchen by Bernardo Bellotto

松永一郎*, 黒瀬重幸*, 花崎正子**, 趙 世晨***, 萩島 哲****

Ichiro MATSUNAGA*, Shigeyuki KUROSE*, Masako HANASAKI**,
Shichen ZHAO*** and Statoshi HAGISHIMA****

This paper is a report on the spatial composition and deciphering the foreground elements of landscape paintings at Wien and Munchen by Bernardo Bellotto. The results of analyses are as followings: 1) Compositions were divided into three types, landscape of overlooking the built-up areas, palace landscape and landscape of roads and buildings. 2) Judging from the flower bed lines of painted garden fitting in well one point perspective lines, the palace landscape painting was drawn by one point perspective method. 3) The rococo style figures of foreground elements arranged palace garden in background look like a noble real portrait showed their situation.

Keywords : *Bernardo Bellotto, Landscape painting, One point perspective method, Wien and Munchen, Deciphered foreground element*

ベルナルド・ベロット, 風景画, 1点透視画法, ウーンとミュンヘン, 添景の解読

1. はじめに

ベルナルド・ベロットは、ザクセン選帝侯の宮廷画家としてドレスデンに滞在中に7年戦争に巻き込まれ、ウーン・ミュンヘン(1759-61)に避難した。

この3年弱の短い滞在期間にもかかわらず、19点の絵画を残した¹⁾²⁾³⁾。本論では、これらの絵画を素材にして、(1)景観の構図とその実景を比較、(2)1点透視画法の適用の検討、(3)前景に描かれた添景の解読、などを通して、ベロットが描いた景観の構図の特徴を明らかにすることを目的としている。

論文の構成は、次節でウーンの都市概要を述べ、3節で絵画と実景の比較、4節で1点透視画法の適用について検討、5節で添景を解読した。

研究の方法を述べると、視点場の現地を調査し、写真撮影、計測調査を行った。また1点透視画法の適用については、3DCGソフト(form.Z 5.0)を用いて検討、添景の解読については、生活科学の観点から文献を参照しながら、比較検証した。

2. オーストリア、ウーンの状態

2.1 ウーンの概要

神聖ローマ帝国の首都ウーンは、1525年、1683年の2回のオスマン・トルコの攻撃をくぐりぬけ、かつて堅固な城壁に囲まれていた。1800年代には、戦争戦術の高度化、ウーンへの人口集中により、城壁は撤去され、その跡地には1865年に、幅約56m、一周5.5kmの環状道路が誕生した。これが有名な「リングシュトラッセ」であり、通称「リング」と呼ばれる。リングの内側が旧市街地であり、リングの外側は新市街地である。リングは完成したもののその内部の市街地では、相変わらず曲がりくねった細い道路は、そのままであった⁴⁾⁵⁾。

一般にウーンの素晴らしさが語られるのは、リングシュトラッセを完成させ、世界都市に変身した19世紀末から皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の崩御までの約20年間のウーンである⁶⁾⁷⁾。

ベロットは、それよりも1世紀前のウーンを描いた。当時のウーンは、どのような都市景観であったのか、ヨーロッパの大部分を支配したハプスブルク家の首都の街並みを、概観してみる。

* 福岡大学工学部

** 九州共立大学

*** 都市・建築学部門

**** 九州大学名誉教授

2.2 ペロットが訪問した時期のウィーンにおける都市化の動き

ペロットが訪問した時期の都市ウィーンの状態を、マクロな記述から抜き出してみる。

「16世紀末から17世紀にかけて、都市ウィーンは、人口、経済ともに、まれにみる成長期に突入していた。都市に拠点をおいていたハプスブルクの宮廷、さらにカトリック教会と修道院に関連する各種組織は、国内外から高位貴族や聖職者を大量に流入させ続けた。経済・産業の局面ではこれらの人々は、その奢侈に満ちた生活様式をつうじて、まさに強力な消費者として機能し、他地域にみられないような、活発な市場を形成する要因となったのである。」⁸⁾

一方で農民の都市への流入も増え続け、次の世紀には更に加速されることになる。その結果、膨大な貧民階層が生まれ、その中には生きるために物乞いする者さえめずらしくなかった。ペロットの絵画にはこうした都市の様子を今に伝えている。

やがて市壁に囲まれた旧市街が収容しきれなくなった都市人口は、18世紀半ば以降、急速にその周辺部へと流出した。「都心部の住民数が停滞しはじめたのにたいし、フォアシュタットと呼ばれる郊外部では、1740年代に約10万人を数えたその人口が、1790年に17万人に達していた」^{9) 10)}

次第に、「シュテファン教会近くのアイゼン広場では、かつてあらゆる種類の貨物を積んだ馬車が行き交い、露店を広げた商人が賑やかに声を掛け合っていた市内の広場は、着飾った散策者が静かに歩む場所が変わっていく…旧市街の広場で巨大な桶を広げた魚売りの女たちが賑やかに叫び声をあげるといふ、古来の都市の日常風景も、すこしづつ陰を潜めていく」⁸⁾。

合理的な思考が進み、市門の開放、都市生活における消費文化が浸透していく。マリア・テレジアの一連の政策が都市にもたらした変革は、他方、都市の生活や住民の営みを著しく多様化させる結果にもつながった。またオーストリア大貴族の中でも、特にリヒテンシュタイン家とロブコヴィッツ両家は芸術の保護者として¹⁰⁾、有名であった。

以上のような都市生活の様子は、絵画に描きこまれた庶民の姿にも反映している。

3. オーストリア・ウィーンでの絵画

ペロットは、このウィーンで、旧市街と新市街の郊外の構図を含めて16点の絵画(シュロスホーフの3点を含む)を描いている。これらは、大きく3つのタイプに分けられる。

1つは、「市街地の街並みの景観」でリンク内の市街地の様子であり、2つはリンク外からリンク内の「市街地の全貌を見渡す景観」であり、3つはリンク外にあって「宮殿の景観」を描いたものである。

3.1 市街地の街並みの景観

これに該当するのは、6点であり、ウィーン市内のリング内にある教会等のシンボリックな建築物を近景に配した絵画である。①建築のファサードを正面に配したものと、②建築を広場や通り沿いの側面に配して、市街地の軸景として描いたもの、の2つの構図があり、それぞれが対となって描かれた(表3.1)。

3.1.1 ウィーン、北西から見たフロイユング

視点場は、フロイユングの西側の交差点近傍(タインファルト通り上)である。このタインファルト通りから東方向のショッテン教会のファサードを、正面に見る景観が描かれている(図3.1に絵画と実景の写真

表3.1 市街地景観のまとめ

画題	視点場(○数値は、視点場図3.16と一致)	視対象			広場、幅員
		近景	中景	遠景	
市街地の景観シリーズ					
1. Wien, Freyung von Nordwesten aus, 1759/60, 116 × 152	フライユングの西側の交差点(タインファルト通り上)① 画角: 50度	ショッテン教会(27度、60m)			広場(28×37m)、D/H=1.3~1.7、歩道幅員(3.7m)、車道幅員(7m)
2. Wien, Freyung von Sudosten aus, 1759/60, 116 × 152,	フライユング広場の南側で交差点(ストラウヘティーフア通り)②	ショッテン教会の側面(南西、18度) 鐘楼を見る(28度、80m)			広場(85×34m)、D/H=1.5~3.9
3. Wien, Mehlmarkt (Neuer Markt), 1759/60, 116 × 155	ノイマルクト広場の西南寄り③ 画角: 70度	カプチーン教会(37度、50m)	ステファン教会(16度、400m)		広場(42×166m) D/H=1.7
4. Wien, Lobkowitzplatz, 1759/60, 115 × 152,	アウグストネル通りとスピーゲル通りの交点④ 画角: 65度	演劇博物館(25度、50m)			広場(44×21m) D/H=1.1~2.3
5. Wien, Universitatesplatz, 1759/60,	ユニベルシュテーツ広場のベッケル通り寄り⑤ 画角: 80度	大学(31度、50m)、イエズス会教会(35度)			広場(47×25m) D/H=1.2~2.2
6. Wien, Dominikanerkirche, 1759/60, 115 × 155.5	ポスト通り(北側寄り)⑥ 画角: 55度	ドミニカ教会(42度、50m)、ウィーン大学(34.5度、50m)			車道幅員(16.5m) D/H=0.93
平均	画角: 65度	仰角: 32度(超近景)			広場(D/H) 1.3~2.1

を掲載，以下同じ)。手前には小さな広場がある。

実景では，教会前の広場が狭く，十分な「引き」はないが，教会のファサードは絵画と同じである。

3.1.2 ウィーン，南東から見たフロイユング

視点場は，フロイユング広場の南側で交差点近傍である。

このフロイユング広場の中央地点から，北西方向にショッテン教会の側面を見た光景が描かれた(図3.2)。中央にフロイユング広場とショッテン教会の南西側面と鐘楼を見る。ほぼ実景と同じであるが，周囲の建物は変貌している。

広場には露店や丸い屋根付きの屋台等で販売している様子など，活気のある街の様子が描かれた。

3.1.3 ウィーン，メールマルクト広場

視点場は，ノイマルクト(ケストナー通りの近く)広場の西南寄りである。ノイマルクトは，リング内のほぼ中央部にある。1210年までは，メールマルクト(小麦粉市場)として知られた²⁾。

この絵画は，このノイマルクト広場を南から北方向に見た景観が描かれている(図3.3)。左手前はカプツイン教会，右手奥には，シュテファン教会，中央の噴水とともにノイマルクト広場が描かれた。カプツイン教会とこの噴水は，現在もある。右手の建物群は，現在はすべて変わっている。わずかに，シュテファン教会の塔が，建物上部に見えるのみである。

3.1.4 ウィーン，ロブコヴィッツ広場

この絵画は，ロブコヴィッツ広場とそれに面するロブコピッツ宮殿を南から北方向に見た景観が描かれている(図3.4)。視点場は，アウグストネル通りとスピーゲル通りの交点である。ロブコヴィッツ宮殿は，現在演劇博物館として残っている。右手の建物は，現在は面影なし。中央部寄り屋根越しに，鐘楼が見えているが，これはシュテファン教会の鐘楼とカプツイン会修道士教会の裏側が見えていると思われる。現在は建て込んで見えない。

3.1.5 ウィーン，ユニベルシュテト広場

この絵画は，ユニベルシュテト広場の南東(広場が極めて狭いが建物を背にして)より，北西方向にバロック様式の大学のファサードを正面に見て，右手にイエズス会教会を見た景観が描かれている(図3.5)。視点場は，ユニベルシュテト広場でベッケル通り寄りである。右手の教会のファサードは，前面の広場に対して高く支配的であり，現存している。

周囲の建物群に比べて広場が小さくて，「引き」に乏しい。写真では右手の教会もほとんど捉えることは出来ない。左手のベッケル通りの奥には塔が描かれているが，現在は無い。

3.1.6 ウィーン，ドミニコ教会

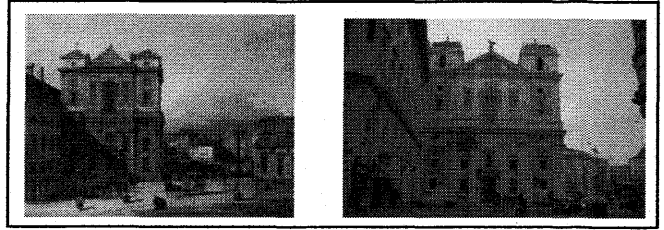


図3.1 ウィーン，北西からみたフロイユング



図3.2 ウィーン，南東からみたフロイユング

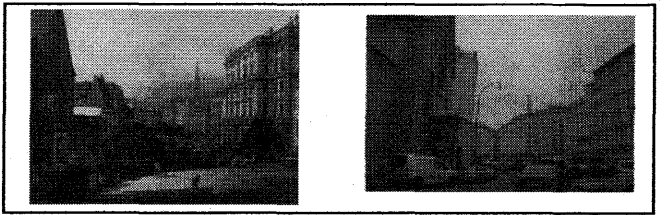


図3.3 ウィーン，メールマルクト広場

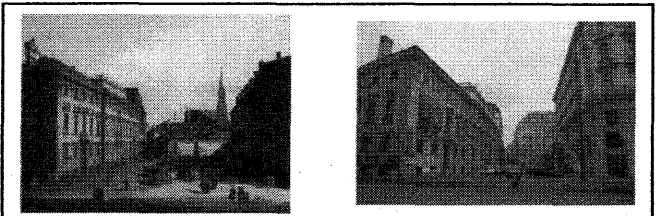


図3.4 ウィーン，ロブコヴィッツ広場



図3.5 ウィーン，ユニベルシュテト広場

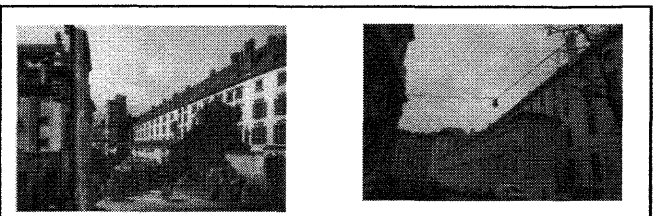


図3.6 ウィーン，ドミニコ教会

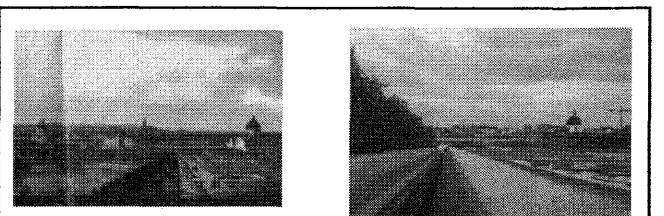


図3.7 ウィーン，ヴェルベデーレの庭園から見る

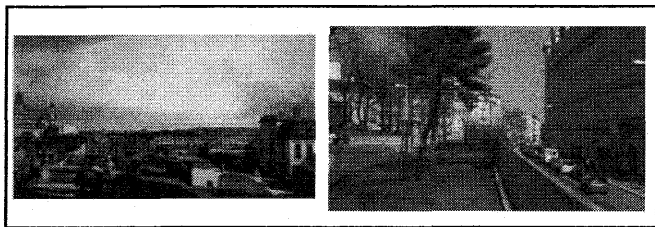


図 3.8 ウィーン、カウニッツ宮殿とマリアヒルフ教会

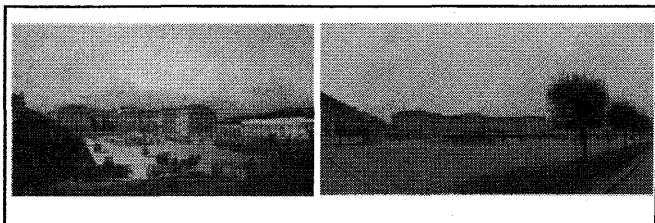


図 3.9 シェーンブルン宮殿、入口から見る

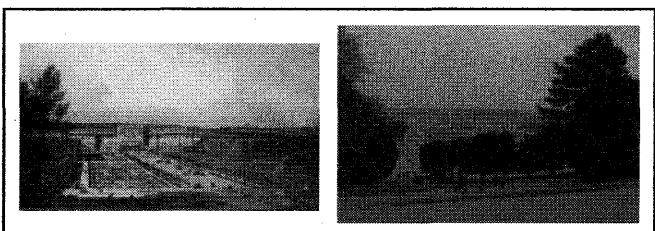


図 3.10 シェーンブルン宮殿、庭園から見る

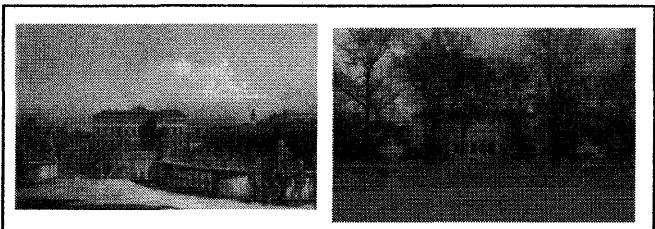


図 3.11 ウィーン、リヒテンシュタイン宮殿、庭園側から見る

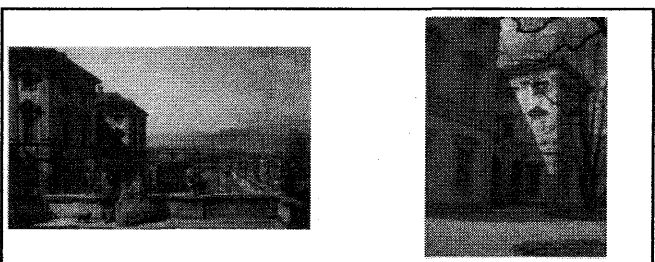


図 3.12 ウィーン、リヒテンシュタイン宮殿、テラスから見る

視点場は、ドミニコ修道士教会近くポスト通り（北側寄り）である。

この絵画は、このポスト通りの北から南方にポスト通りを見る景観が描かれている（図 3.6）。左手にバロック様式のファサードをもつドミニコ修道士教会を横に見て、右手には長い建物のウィーン大学を見る。このポスト通りの壁際には、馬車に積んだ荷を降ろし、商品を並べて住民を相手に商売をしている様子が描かれた。

ドミニコ教会、ウィーン大学の外観はおおむね残っているが、中央の奥に配された塔は見えない。また建物高さ比べて、この広場もまた奥行に乏しい。

3.1.7 まとめ

(1) 道路や広場では、当時の賑わいの様子、都市活動の様子的一端を描いた。

(2) 広場の D/H は 1.3 ~ 2.1, その仰角は平均で 32 度である。いずれの数値を見ても、やや混み合った市街地の空間を描いた。

(3) 画角は、平均で 65 度であり、通常の視野の範囲で描かれた。遠景要素が描かれることはなかった

3.2 市街地の全貌を見渡す景観

該当するのは、ヴェルベデーレ宮殿を描いたもの 1 点、カウニッツ宮殿を描いたもの 1 点である（表 3.2）。

3.2.1 ウィーン、ヴェルベデーレの庭園から見る

視点場は、ヴェルベデーレ上宮の建物内部の上階の左手（西側）である。この絵画は、このヴェルベデーレの上宮を視点場として北方向、庭園それに市街地を見る景観が描かれた（図 3.7）。

近景に配された左手の庭園は池、右手は噴水、ともにフランス式庭園である。隣接している左手シュバルツェンブルク宮殿と右手に下宮が庭園の縁に見える。

左手にドーム屋根のカールス教会、右手にドーム屋根のサレジオ会修道院が中景の範囲に配された。その右手に 2 つの塔をもつイエズス会教会、シュテファン教会の左手のドームのセント・ピーター教会が遠景に配された。ウィーンの市街地の街並みのスカイラインが中景から遠景の距離にあって、的確に把握されている。

手前に描かれた庭園は、現在中央の並木（樹木帯がレンガ塀に変わり）によって区切られており、左手半分の庭園が見えない。軸線の線上に、西日の木蔭のところで、着飾った貴族が三々五々散歩を楽しんでいる。庭園の手入れをしている職人の姿も描かれた。

3.2.2 ウィーン、カウニッツ宮殿とマリアヒルフ教会

この絵画は、カウニッツ宮殿とその庭園、そしてマリアヒルフ教会が描かれている。この敷地は、リング中心部から 2km の距離でリング外にあり、マリアヒルフ通りに面している。すぐ手前にはカウニッツ宰相が大きく描かれた（図 3.8）。

視点場は、現在のフリッツ・グルンバウン公園のテラスであると判断されるが、地形や周辺市街地の状況も大きく変貌しており、詳細は不明である。

この教会と対照的に、右手にカウニッツ宮殿と美しく整備された庭園が描かれており、さらに画面中央はるか遠くにドナウ川とウィーンの街並みが描かれた。

この構図は、画面中央付近に軸線を配して、両側に教会あるいは宮殿を配し遠くにウィーン市街を見た構図で、ヴェルベデーレの構図と類似している。

3.3 宮殿の景観

これに該当するのは、シェーンブルン宮殿の 2 点、

表 3.2 市街地の全貌を見渡す景観のまとめ

市街地の全貌を見渡す景観シリーズ	視点場(○数値は、視点場図3.16と一致)	近景	中景	遠景	広場など
7. Wien, vom Belvedere aus gesehen, 1759/60, 135×213	ベルベデーレ上宮左手(西側)の上階⑦ 画角:72度	庭園(近景)	カールス教会(970m)、シュワルツエンベルグ(650m)、ベルベデーレ下宮(500m)、サレジオ会修道院(2度、450m)	ステファン教会(2度、1.9km)、イエズス会教会(2km)、セント・ピーター教会(2.2km)	庭園(120×540m)
8. Wien, Palais Kaunitz, Blick gegen die Mariahilfer Kirche, 1759/60,	Fritz-Grunbaun-Platz⑧ 公園サイドのテラス 画角:105度	庭園(近景) マリアヒルフ教会の鐘楼(高さ52m)			
平均	画角:89度				

リヒテンシュタイン宮殿の2点, シュロスホーフの3点である(表3.3)。シェーンブルン宮殿は, 市中心部から南約5kmの位置にあり, リヒテンシュタイン宮殿は, 中心部から約2km北の位置にあり, シュロスホーフは, ウィーンから東部45kmの位置にある。

3.3.1 シェーンブルン宮殿, 入り口から見る

シェーンブルン宮殿のエントランスを入ると(南方向)すぐ中庭がある。ここを視点場として, 南方向に正面のシェーンブルン宮殿を見た景観が, この絵画である(図3.9)。中庭の左手は, 現在露店があって見えないが, 実景としての宮殿は, 残されている。第2回目の調査では, 露店の位置が変わっていた。

右側の建物のほうが実際は広く, 左側は少ししか入らないが, 絵画では逆となっている。宮殿の中庭には, 大勢の人物が描かれている。

3.3.2 シェーンブルン宮殿, 庭園側から見る

視点場は, シェーンブルン宮殿の庭園のやや小高い

丘陵地で中央やや西側にあり, そのスロープの芝生の中である。

絵画は, この庭園側から宮殿を見たもので, 北方向に庭園とシェーンブルン宮殿, そして遠くにウィーンの市街地のスカイライン見た景観が描かれた(図3.10)。市街地にはシュテファン教会, イエズス会教会, カール教会の高い塔が聳えている。

庭園には, 貴族と共に, 庭園を整備する職人の姿も描かれている。芝を刈っている職人, 木々を刈り込んでいる職人, あるいは園路をローラで馴らしている職人である。

宮殿の屋根のラインは, 遠くの丘陵地の山並みのラインとほぼ一致している。マリアヒルフ教会は見えないが, カウニッツ宮殿の絵画とほぼ同じ方向のウィーン市街地を見た。

実景の写真では, この大庭園の丘の上にある樹木によって視線が遮られ, ウィーン市街地の眺望をえるこ

表 3.3 宮殿の景観のまとめ

宮殿シリーズ	視点場(○数値は、視点場図3.16と一致)	近景	中景	遠景	広場など
9. Schonbrunn, Ehrenhofseite, 1759, 135×235	シェーンブルン宮殿のエントランスを入れて(南方向)すぐ中庭のやや東。すぐ背後には建物がある⑨ 画角:88度	シェーンブルン宮殿(7度、150m)を見る			中庭(160×220m) 中庭(細砂利敷き6m)
10. Schonbrunn, Gartenseite, 1759/60, 134×238,	シェーンブルン宮殿の庭園のやや小高い丘陵地⑩ 画角:68度	シェーンブルン宮殿の庭園	シェーンブルン宮殿(0度、480m)、	ステファン教会(0度、5.6km)、イエズス会教会(6km)、カール教会(5km)マリアヒルフ教会(3.9km)	広場芝生部分(400×1km) (細砂利敷き6.7m)
11. Wien, Palais Liechtenstein in der Rossau, Gartenseite, 1759/60,	リヒテンシュタイン宮殿のやや高くなっているテラス⑪ 画角:75度	リヒテンシュタイン博物館(6度、250m)		セント・ピーター教会(1.9km)、ステファン教会(107mの高さ、あるいは137mの高さの表示あり、2.1km)、イエズス会教会(2.2km)	庭園(180×150m)
12. Palais Leichtenstein in der Rossau, Ansicht von der Seitenterrasse aus. 1759/60,	リヒテンシュタイン宮殿(現博物館)の庭園の右手(東側)の2階テラス⑫ 画角:100度	宮殿(現在は事務所)(4.5度、250m)			
13. Schlossohof, Ehrenhofseite, 1759/60, 138×237,	シュロスホーフの正面の中庭⑬ 画角:65度	シュロスホーフ(約50ha)、シュロスホーフ宮殿(10度、170m)			前庭(106×92.3m) D/H=10.4
14. Schlossohof, Gartenseite, 1759/60, 136×234,	シュロスホーフの庭園(噴水のあるところ)⑭ 画角:95度		シュロスホーフ宮殿(5度、380m)		庭園(180×540m)
15. Schlossohof, Ansicht von Norden, 1759/60, 136×238,	シュロスホーフのオイゲン王子通り⑮ 画角:98度	シュロスホーフ宮殿(北面)(10度、180m)		デーベンの集落	車道幅員(2.2m)
平均	画角:84度				

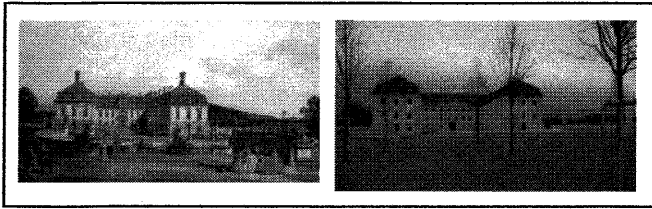


図 3.13 シュロスホーフ、入口から見る

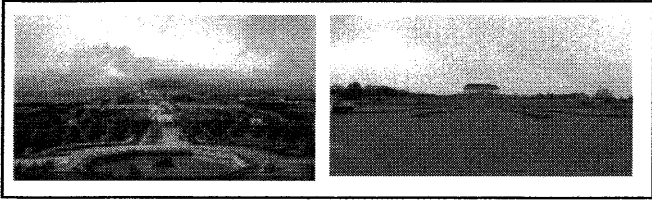


図 3.14 シュロスホーフ、庭園から見る

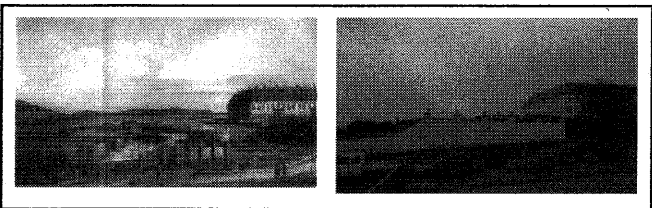


図 3.15 シュロスホーフ、北側から見る

とができない。

3.3.3 ウィーン、リヒテンシュタイン宮殿、庭園側から見る

この絵画は、リヒテンシュタイン庭園側から南方向、リヒテンシュタイン現博物館の方向を見た景観が描かれている(図 3.11)。視点場は、リヒテンシュタイン宮殿のやや高くなっているテラスである。この宮殿は樹木に囲まれ、その内側には幾何学的パターンで設計された庭園がありその様子が描かれた。

博物館の左手には、市街地のリング内のセント・ピーター教会、シュテファン教会、そしてイエズス会教会の塔が描かれた。右手には、高台の建物群が緑の中に描かれた。リヒテンシュタイン博物館のファサードは、実景で見るように絵画とおおむね一致している。しかし左手と右手の両側に描かれた市街地の姿は、現在は見えない。手前のテラスの手すりにある彫刻は、現存しないが、ゆったりとした階段は現存している。

3.3.4 リヒテンシュタイン宮殿、テラスから見る

この絵画は、正面には大きくリヒテンシュタイン夫妻が描かれている。視点場は、リヒテンシュタイン宮殿(現博物館)の庭園の右手(東側)の2階テラスである。

左手にリヒテンシュタイン宮殿(現博物館)と、右手の北方向には、現在事務所になっている宮殿の光景が描かれている。手前右手に見えるテラスは、宮殿(博物館)につながっているもので、2階の屋根テラスである(図 3.12)。

3.3.5 シュロスホーフ、入り口から見る

この絵画は、シュロスホーフの西側(エントランス)から東方向にシュロスホーフ宮殿の正面を見る景観が描かれている。視点場は、シュロスホーフの正面の中庭の中央部である。正面手前、左手に2人の男性、右手に1人の男性と2人の女性、中庭にも数名の人物が描かれている。前庭にある噴水と階段は、修復され現存している(図 3.13)。

実景の写真では、正面の庭園は、修復は終了しているものの、高木がまだなく、間延びのした庭園となっている。

3.3.6 シュロスホーフ、庭園から見る

この絵画は、東側の庭園から西方向にシュロスホーフ宮殿の建物を見る光景が描かれている(図 3.14)。視点場は、シュロスホーフの庭園のほぼ中央部(噴水のあるところ)である。

庭園もちろんそうであるが、絵画も完全なシンメトリの構図で描かれた。建物と噴水(カスケード)が4段にわたって構成され、刈り込まれた生垣とシンメトリに並んだ樹木の庭園を見た。

実景の写真では、宮殿部は改修済であるが、庭園部は現在修復中であつた。バロック様式の庭園は、このように広大で茫洋としており、実景のとおりだとすると、絵の構図としては迫力がない。絵画では、建築部分を拡大して描いている。実景よりも絵画のほうに迫力がある。また、絵画では植生の違いを詳細に描き、前景の庭園部分を生き生きと表現した。

3.3.7 シュロスホーフ、北側から見る

この絵画は、シュロスホーフ宮殿の北側を通るオイゲン王子通りを視点場として、宮殿の側面(北面)を俯瞰で見る光景が描かれている(図 3.15)。左手東側はるか遠くに、テーベン13)の城が描かれている。

庭園を側面から描くことによって、庭園内のシンメトリカルな空間構成が良く理解できるようになっている。これによって庭園のレベル構成、擁壁、一部は堡塁のような壁面で構成された庭園、階段での結びつき、壁面の手すり、そして庭木の高木と低木の配置が、良く理解できるのである。

4. ドイツ、ミュンヘンの絵画

ペロットはウィーンからミュンヘンへ、マリア・テレジアの推薦状をもって1761年早々に訪問している。そして1762年1月にはドレスデンに帰っており、わずか1年足らずの滞在であった¹³⁾。

ペロットは、このミュンヘンの代表的な景観を3点描いた。少ない絵画であるが、描かれた絵画は2つのタイプに分けられる(表 4.1)。視点場の位置を図 4.4 に示す。

4.1 街の全貌を見渡す景観

これは、市内中心部の東丘陵地からミュンヘン市内の

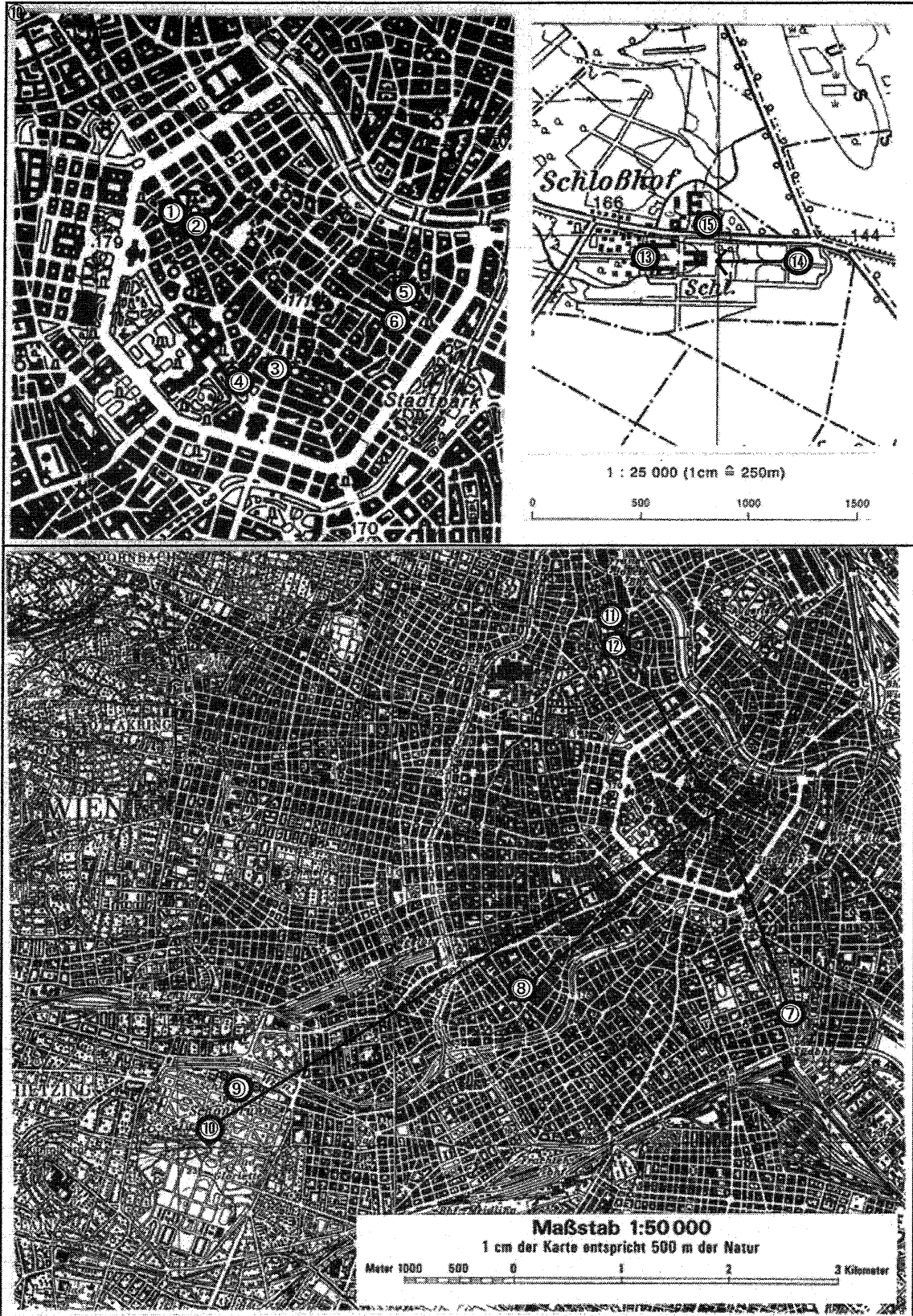


図 3.16 ウィーンにおける視点場の位置，視点場の番号は表参照のこと

街並みを俯瞰した構図で1点である。

4.1.1 ハイデハイゼンの丘から見るミュンヘン市街

視点場は、イザル川の右、ハイデハイゼンの丘、その上にあるマキシミアノイム（バイエルン州議会）のテラスである。絵画は、この丘陵地のテラスから西

方向のミュンヘンの市街地を見渡す景観が描かれた（図 4.2）。ペロットが描いて以降は、この光景は、「カナレットの視線」として知られることになる。

絵画では、手前左手には、対岸へいたる門が見える。イザル川の対岸に、イザル門、ピーター教会、フラウ

表 4.1 ミュンヘンでの絵画のまとめ

ミュンヘン (1759-1761)	視点場(○数値は、視点場図4.4と一致)	近景	中景	遠景	広場など
1. Blick auf Munchen von Haidhausen aus, 1762/67, 132×235	マキシミリアノイム(バイエルン州議会)のテラス① 画角: 50度	イザール川(130m)		フラウエン教会(塔1度、1.5km) サルバドル教会(0.6度、1.6km)、ティアチノ教会(0.5度、1.5km)	イザール川(300m) イザール門(950m) 広場(7000㎡の円形) 車道幅員(9.5m)
2. The Nymphenburg Palace from the Park, 1761, 132×235	ニュンヘンブルグ宮殿の庭園側の池沿い② 画角: 88度	池庭園(100m)	ニュンヘンブルグ宮殿(3度、350m)	フラウエン教会(0.9度、6km) ティアチノ教会(6.1km)	パレス・パーク約180ha、裏の芝生庭園(140×300m)、細砂利歩道幅員(5.3m)
3. Schloss Nymphenburg von der Stadtseite, 1761,	シュロス・カナルとメンツインガ通りの橋③ 画角: 85度	約1.5kmの直線のカナル(約22mの幅)池	池宮殿(1.5度、600m)		正面庭園(2.4ha)、歩道幅員(6.8m)、車道幅員(7.4m)
平均	画角: 74度				

エン教会、やや右手にサルバドル教会、ティアチノ教会が見える。右端の塔は、レジデンツの塔である。

絵画の左手に見えるのは、オーエル塔であるが、現存しない。実景で見える正面の通りは、マキシミリアン通りであり、川沿いは樹木で覆われ、その先の両側は官公庁の新市街地となっている。現在では、市街地の街並みの上にわずかに、フラウエン教会、ティアチノ教会の塔が見える。

画角は50度。「全貌を見渡す景観」としてはやや画

角が狭い。実景に比べて絵画での市街地の街並みが、大きく描かれている。

4.2 シンボリックな宮殿の景観

これはバロック様式のニュンヘンブルグ宮殿とその大庭園を描いたもので、シンプルな構図である。

4.2.1 庭園から見るニュンヘンブルグ宮殿

このニュンヘンブルグ宮殿は、ミュンヘン市街地から北西に約6kmの位置にある。視点場は、このニュンヘンブルグ宮殿の庭園側で、庭園花壇と中央水路の交点にあるやや大きめの池の近傍にある。このパレス・パークは、約180haに及ぶバロック式の大庭園である。

この絵画は、西側(庭園)から東方向、ニュンヘンブルグ宮殿の裏側を見る景観が描かれている(図4.2)。視点場を高く設定して、右手には遠くにミュンヘンの市街地の目印としてのフラウエン教会、ティアチノ教会が描かれた。

手前の池にはゴンドラが浮かぶ。確かに、ヴェネツ

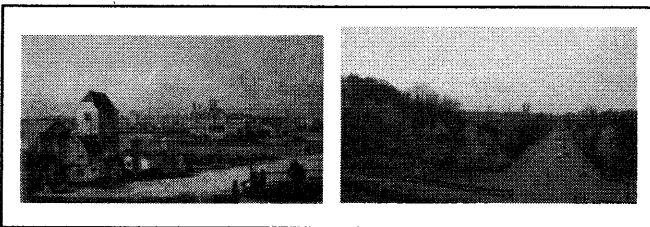


図 4.2 ハイデハイゼンの丘から見るミュンヘン市街

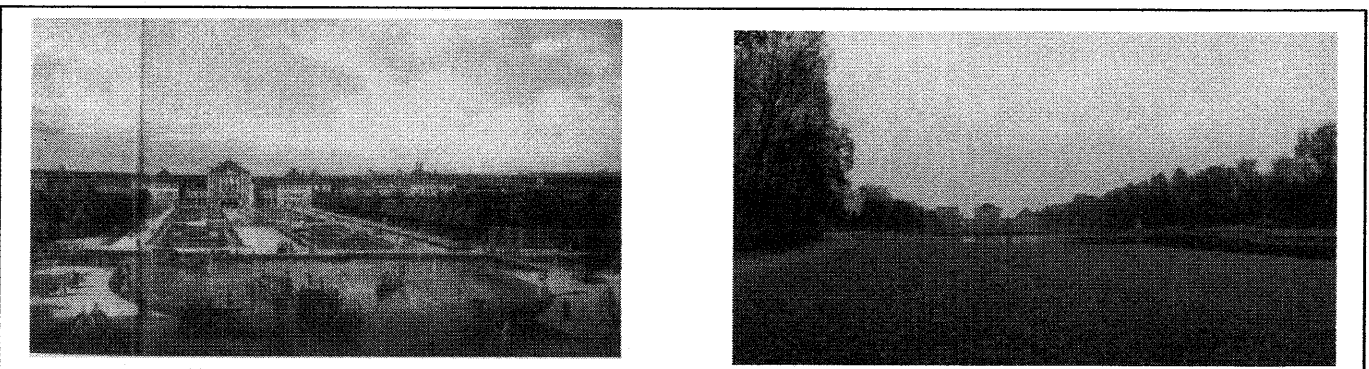


図 4.3 庭園から見るニュンヘンブルグ宮殿

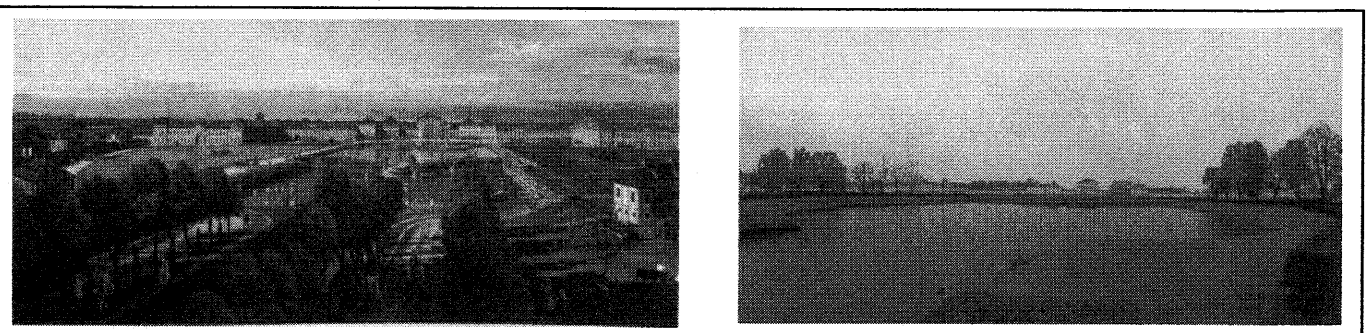


図 4.4 市街地から見るニュンヘンブルグ宮殿

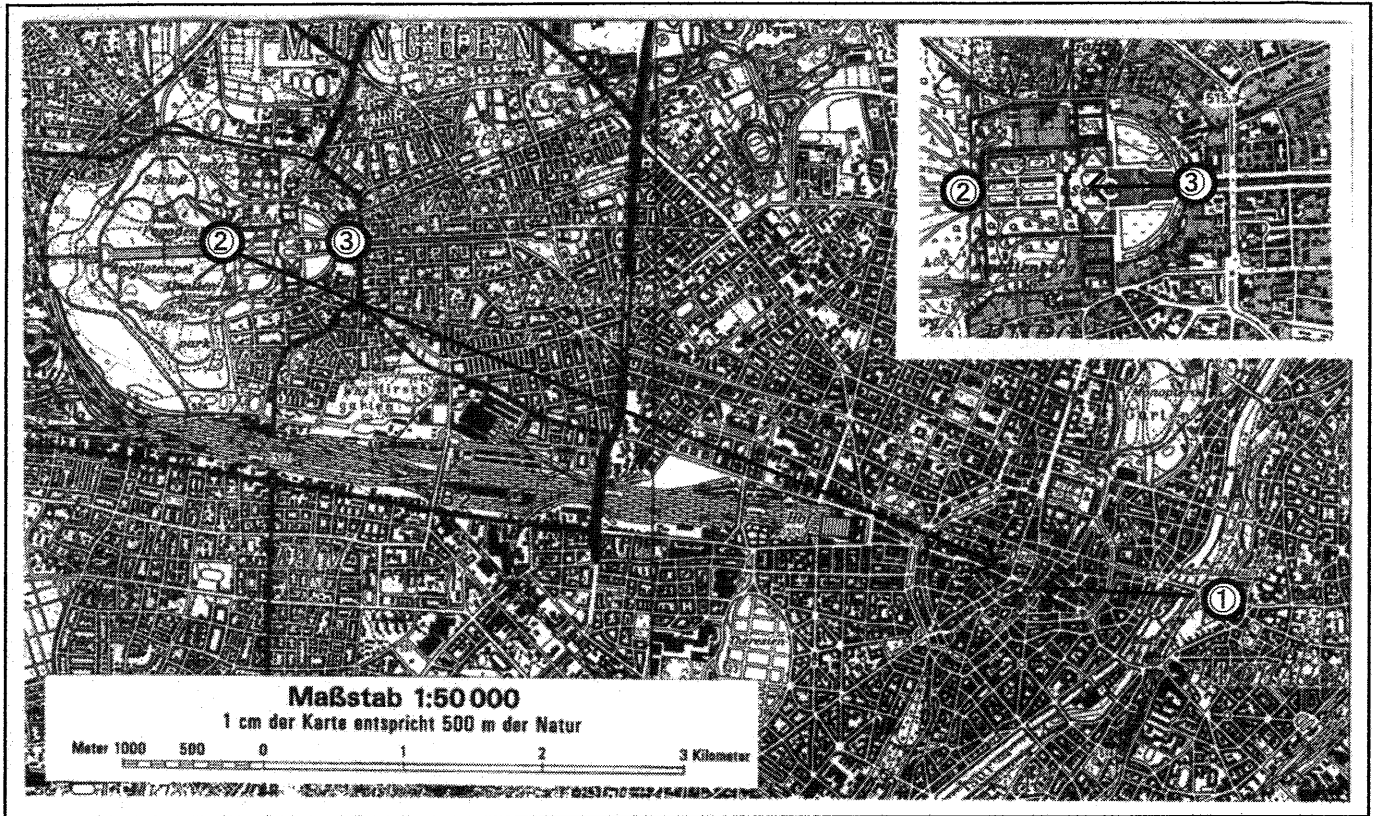


図 4.5. ミュンヘンにおける視点場の位置：視点場の番号は表参照のこと

イア共和国から外国の君主、大使には豪華なゴンドラが贈られ、船頭たちも融通していたという。バイエルン選帝侯にも贈られたことであろう。

しかしながら実際には、そのような高い視点場はなく、また樹木で隠されて、はるか遠くの市街地を見渡すことはできない。

庭園のデザインは、現在ではシンプルになってベロットが描いた当時のような芝生の模様はないし、池の形状も、現在とは異なっているようだ。

4.2.2 市街地から見るニュンヘンブルク宮殿

視点場は、ニュンヘンブルク宮殿のエントランスにある庭園の池の近くである。庭園から見る宮殿の景観の視点場に対して、ほぼ対称な位置にある。

そして絵画は、ニュンヘンブルク宮殿の正面エントランス（庭園）と宮殿を見た景観が描かれた（図 4.4）。

实景の写真で分かるように、宮殿の建物高さに比べて、前庭園も広大であり、全体的にシンメトリカルに配置・レイアウトし、カスケード（滝）は3段にわたって整備されている。これも庭園と宮殿を含めて俯瞰的に見た構図を描くという手法、建築製図的に言えば1点透視画法によって、庭園の伏図を描いたと判断できる。

5. ニュンヘンブルク宮殿を描いた2点の絵画についての透視画法からの検討

ベロットが描いたニュンヘンブルク宮殿の2点（図

4.3, 図 4.4）を素材にして、ベロットが1点透視画法を直接的に適用して描いたことを検証する。

まず画面上で、庭園の花壇のライン、カナル、池のラインなどの直線の部分を概略トレースして引きのぼしてみると、画面の奥でおおむね1点で一致する。やはり1点透視画法で描かれていると仮定することができる。ただ仔細に眺めると、部分的に差異があるところも見受けられる。

5.1 分析の前提条件

先に（絵画 4.2.1）、現在の池とやや異なった形状であると推測しておいた。まずはこの池の形状を検討する。

ベロットが描いている池の形状は、一部は円形であるがカナル（運河）に繋がるところが方形に変化している。現在の池は、カナルには円形で直接繋がっている。ベロットが描いた池と異なっている。ベロットの絵が間違っているのか、ゴンドラを描くために広げて描いたのか。

当時の池の形状を、庭園関連の文献を通して調べてみる。古地図¹¹⁾には、ベロットが描いたような池と類似した庭園の様子を図面がある。また、「1755年無名の画家による測量図」¹²⁾では、角型となった池として描かれており、「1801年ニュンヘンブルクの改修のためにシッケルが指針として設計」¹²⁾にも角型の池が描かれている。「1832年庭師エツフェナーによる設計図」¹²⁾になると、今日の池と同じようにカナルと池は円形

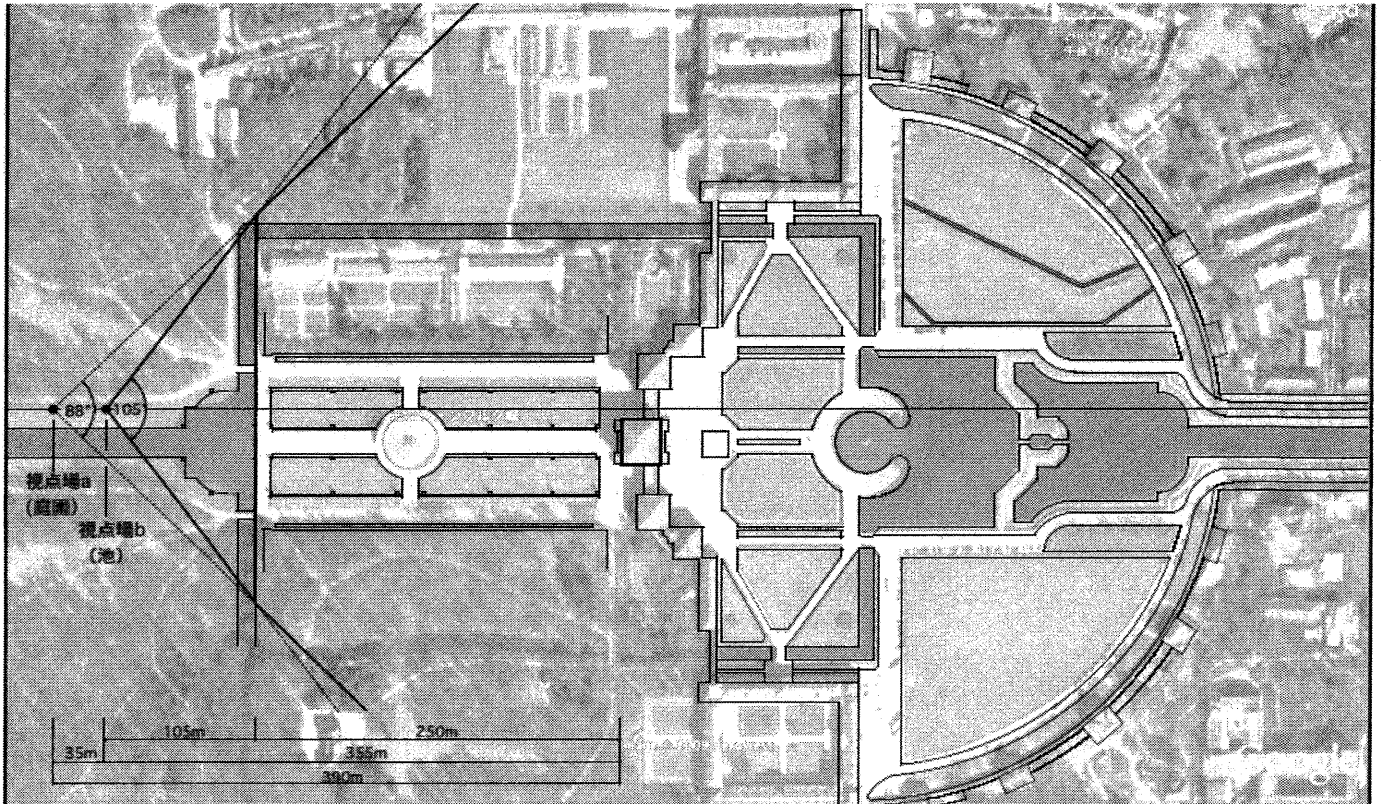


図 5.1 ニュンヘンブルク宮殿を見る視点場と画角、仮定した庭園の線画

で繋がっている。

このような資料をみてくると、ベロットが描いた1760年当時には、角形でカナルと繋がっていた可能性が高い。その後1832年になってエフェナーにより池のデザインが改修され、現在の池の形状になったと考えられる。

従ってエフェナー以前の古地図を参考にしながら、池の形状を推定した(図5.1参照)。

5.2 CGを適用するに際しての仮定

庭園の平面図へ適用するに際しては、宮殿の建物部分は、ラフな平面として製図し、現地調査で計測して補充、庭園部分は、平面図が現存しているので、概略の平面図とグーグルの航空写真から推定し、ラインを確定した。

中央の建物と人物が一緒に写っている写真、ファサードのスケッチ¹³⁾及び現地調査などから中央の建物幅は、約33.1mとした。

中央の建物軒高は、約22.3mと推定、これはベロットが描いた中央の建物の幅と高さのプロポーション及び現地調査から判断した。以上の仮定と、1点透視画法を試行錯誤しながら絵画に適用して、収斂する点を見出していた。

(1) 庭園の芝のパスラインが収斂する消点の高さは、中央の建物軒高の関係から約18.5mと推定した。

(2) 透視図法の原理から消点と視点の高さは、同一であることが一般的であるため、視点場の高さは約18.5m

と推定した。

(3) 消点の位置(左右の位置)は、庭園の花壇のラインの交点から正面建物の左手約8.0m、ウイングの建物の間と推定した。

5.3 二つの視点場と画角の推定

1つの視点場、1つの画角を想定して、CGを適用してみると、手前の池の部分で、パースのラインが大幅にずれ、不一致のラインが見出される。

そこで、芝生部分の庭園を描く場合の視点場aと、池の部分を描く場合の視点場bの2つにわけて、1点透視画法を適用して絵画との差異を検討した(図5.2)。

(1) 画角と視点場位置を変えながら数枚ずつパースを作成した。この作業によって、試行錯誤で絵に最も近い画角と視点場を探すという方法で推定した。

(2) 視点場aの庭園では、中央の丸い噴水の位置と池際の芝、それに園路の境界線に注目した。

視点場bの池を再現する場合では、灯籠の位置と手前側の端部の水平ラインに注目し、まずは画角を10度ずつ変化させながら凡その見当をつけ、最後は5度ずつの精度で画角を推定した。

5.4 複数の視点場から描いている

(1) 視点場aの場合(庭園の芝生を再現する場合)

画面の上部2/3は中央建物のファサード面からおおよそ400m離れた高さ18.5mの視点場aから画角85度(カメラのレンズでは20mm相当)の場合の絵画のラインに最

も近く、これで描かれていると判断した。

(2) 視点場 b の場合 (池を再現する場合)

水面を境とした画面下部 1/3 については、高さは視点場 a と同じであるが、40m 程前進した視点場 b から、画角 105 度 (レンズでは 14mm 相当) の超広角で描かれた場合が、池のラインと最もよく適合すると判断した。

(3) 現地調査で確定していた画角 88 度との整合性

先の 4.2.1 (表 4.1 参照) で視点場を 1 つと仮定した場合の現地調査で計測した画角は、約 88 度であった。

一方いままで行ってきた図上の計測では、庭園部で 85 度と池部で 105 度であった。そこで、修正して 88 度として庭園部の線画を作成したが、絵画の画面の大きさを考慮すると、おおむね同じであった。但し図はこの 88 度に基づいて表現した。

(4) 以上のように判断するが、当時の製図機器や作図の精度によった絵画上での計測と、現在の CG による再現の結果を直接的に比較して、「厳密な数値」の議論をするのは、望ましいことではない。おおむね 2 つの視点場から描かれたこと、それぞれの画角が 88 度近傍と 105 度近傍であること、を確認しておけば十分である。

池の中に浮かぶゴンドラや噴水の配置を平面上で再現してみると、その混雑の度合いからも池を広く描かなければならなかったことが分かる。

5.5 考察

パースラインに歪みがなく、一見するとひとつの視点場から描かれたように見えるが、しかしながら視点場は 2 つであり、それを巧みな合成画として作成して描いていることが分かった。そのためには、以下の条件が必要であったと推測している。

(1) まず、1) 消点、2) 庭の視点場 a、3) 池の視点場 b の 3 点が同じ軸線上にある。

(2) さらに、「2 つの視点場から画角」の図 (図 5.1 参照) に示すように、視点場 a からの画角線と視点場 b からの画角線が、2 つの絵の境界となる池の水面端部ラインで、丁度交差するという関係にある。

(3) つまり、ペロットの絵の巧みな合成画像においては、二つの視点場間の距離と画角との間に、ある一定の関係が存在していることがわかった。

5.6 市街地から見るニュンヘンブルク宮殿の場合

図 5.3 には、エントランスからみた宮殿の絵画に、1 点透視画法を適用した例を示している。庭園側から見た場合の視点、視点高さとは一致しており、約 18.5m としている。

詳細な分析は略するが、市街地側から見た眺望もまた、複数の視点場から描かれた。

6. 添景に描かれた人物の特徴、構図との関係

庭園が描かれた絵画には、添景として前面に大きく人

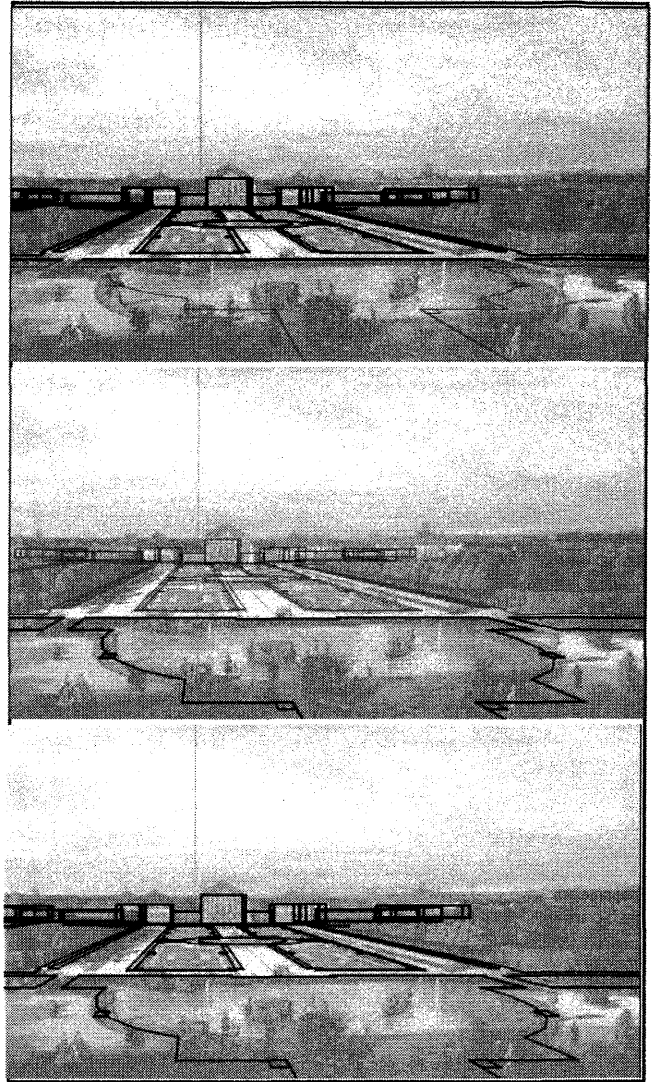


図 5.2 庭園から見るニュンヘンブルク宮殿の適用

(上段：庭園部に合わせた線画，中段：池に合わせた線画，下段：両者を組み合わせた線画)

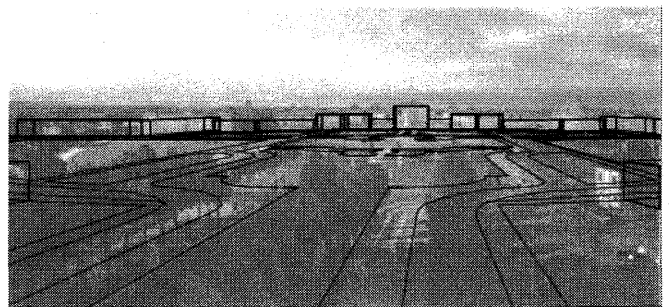


図 5.3 市街地から見たニュンヘンブルク宮殿への適応例

物や先に見たニュンヘンブルク宮殿の池に浮かぶゴンドラなどが描かれていた。それらの添景が、透視画法による直線的でシンプルな構図に、当時の生活感を与えている。

ペロットがウィーンを訪れた時、まず最初にカウニッツ公 (1711-94) とリヒテンシュタイン公から依頼を受けている³⁾。この時にペロットが描いた絵画は、風景もさることながら人物をきわめて大きく描いていることで

ある。前景に、人物の表情や衣服を明瞭に描いたのである。文献に示された服装の図版と比較して人物の衣服を特定してみる。

6.1 カウニッツ宮殿について

この絵画は、宮殿とその庭園を中央部に配した景観を描いている(図3.8)。前景に描かれた人物は、単なる添景には止まらず、人物の表情や服装などが詳細に描かれ、人物そのものを描いた肖像画に近い描き方である。その人物の背後には、庭園の園路と生垣の刈り込みの軸線が充てられており、私たちの視線を、宰相カウニッツ公に向けさせる工夫が読み取れる。

風景画家ベロットは、風景を舞台にしてそこに演じる人物を表情豊かに描いた。後景に描かれた宮殿と庭園は、主人公の所有物であり、私たちは人物のおかれている立場に思いをはせるのである。

カウニッツ公を宮殿の高台に配して、庭園部を見下ろすという構図、その庭園部には数名の貴族が散策し、ウィーンの市街地も遠くに眺めることができる。主人公が、自らの宮殿の立地上の優位性を紹介しているようにとらえることができる。

(1) カウニッツ公の服装

人物に注目すると(図6.1)、カウニッツ公に近づく秘書官らしき人物が書類を持参している。

カウニッツ公の服装をみると、ヴェストはシルバーカラーのジュストコールにやや隠れ、前開きのジュストコールとヴェストのフロントエッジは、ジュストコールと同一素材と思われる幅広いゴールドカラーの布で縁取



図 6.1 カウニッツ宮殿と添景(図3.8の部分)

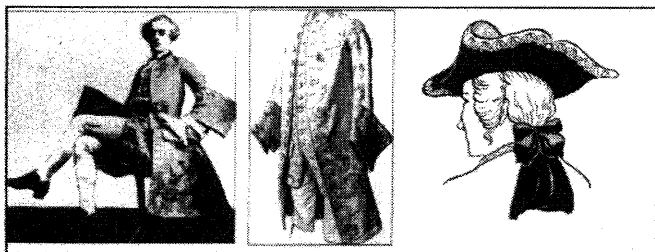


図 6.2 添景の服装に近い図版

左図：1725年頃の男性、末広りのジュストコール(後にフラック)、フランス服装史研究会、中図：スエーデン王の結婚衣装、金銀糸刺繍した、右図：後ろの袋鬘、フランス1728年¹⁴⁾

りされている。カフス、ポケットとそのフラップも同様の縁取りが施され、その上には同色のボタンがずらりと飾り縫い付けられている。

胸元と袖口は装飾的白いシャツをのぞかせている。首周りは白い細い棒カラーを巻き、胸元には赤い布をたらし、アクセントとなっている。脚部は、「エレガントな服装にとって、無駄なだぶつきは最もきらったから、脚部にぴったりとしたキュロット」を身に着けている。カウニッツ公は、「いつも趣味を生かした質素な服装をしていた」¹⁵⁾という(図6.2参照)。

(2) 秘書官の服装

秘書官は、末広りのスーツを着用している。紳士は、「女子服のように、腰に膨らみをまし、裾にかけて美しくひろがっていることを特徴とする。裾を広げるためには、鯨ひげを挿入」するのである。「前中央には、たくさんのボタンが並ぶ。ボタンは贅沢のみせ所となり、種類には限りはなかった。・・・平常は、ボタンをかけないで、下に着用したヴェストをみせているが、胸の部分だけをかるうじて留めた場合、腰から裾にかけての膨らみが、いっそう美しくあらわれた」¹⁴⁾。

(3) 一般の官吏の服装

また左手の官吏が、カウニッツ公のために水コップを準備している。青色のヴェストを身につけ、その上にはジュストコール(時代が新しくなるとフラックに変わる)¹⁶⁾を着る。「紳士たちは、王の趣味に従って、老若を問わず、バラ色、青、青緑などを用いた」。前の開きには、たくさんのボタンを付けている。「これらのボタンは、時には衣服そのものよりも高価であった」という。

その背後には、後ろ向きになってクラッカーを準備している若い貴族が控えている。彼の髪型は、袋鬘である。これは、「紳士たちの間で愛好された型の1つ、・・・波のうっ巻毛の横の部分の部分を短く切って、鳩の翼型やカールで整え、後方の髪型を、クラポーと称するゴム引のような黒タフタの袋にいれるのである」¹⁴⁾。この2人のジュストコール(後にフラック)は、色彩が黄色系の同種の服装と判断され、しかも秘書官のデザインと類似している。

以上のことから判断すると、ここで描かれた服装は、当時の神聖ローマ帝国の高級官僚の制服の姿であると推測できる。

6.2 リヒテンシュタイン宮殿2点

6.2.1 リヒテンシュタイン宮殿、テラスから見る

ベロットは、リヒテンシュタイン公から依頼され、2点の絵画を描いている。1つは現在は博物館側にあたるその2階のテラスに、リヒテンシュタイン公夫妻がくつろいでいる様子である(図3.12参照)。

主景として夫妻の様子、背後には左手にリヒテンシュタイン宮殿、右手にはテラスとその屋上のボーダに彫像、

夫妻の姿が、この彫像に相対するように描かれている。

リヒテンシュタイン公は、当時、「芸術・美術の保護者」の気風をもっていたといわれており、テラスに飾られた彫像が描かれたことによって、そのことが把握できる。リヒテンシュタイン公の背景が理解できる風景画となっている。

(1) リヒテンシュタイン公の服装

リヒテンシュタイン公の服装も、詳細に描かれている(図 6.3)。ヴェストは深紅で、夫人のローブと同系色が使用されている。ジストコールはダークグリーンであるが、フロントはヴェストと共布の赤い前立てで縁取りされ、カフスも同色同一素材で、多くのボタンで飾られている。折り返しの衿がつけられ、生地はベルベットと推定される。

胸元は明るいモスグリーンの薄いリボンを巻いたような布で飾られ、青色のリボンでアクセントしたボータイにつるされているようにみえる。袖口からも胸元と同一素材のリボンをのぞかせ、清楚な感じを与えている。バックル付靴である。

(2) 夫人の服装

夫人の服装は、盛装のローブ・ヴォラント、切り返しのところは良く見えないがブレードで飾り、その横には、ゴールドカラーの刺繍が施されている様子が見える。袖口はレースでカウスの下からでるスカラップ装飾、衿もまた白レースを重ねてブローチで留め、キャップは服装に合わせて赤のリボンで着飾っている。手には扇子。

「身頃は、前面で身体の線にぴったり合わせ、多くの場合、『硬い胴衣』の上に華やかに装飾した三角形の『ピエース・デストマ(胴衣)』や『段段重ねのリボン結び』などがつけられ、前明きのローブの下から見えるようになっていく。ローブは、共布のアンダー・スカートの上に前明きに着用され、『盛装』と同じく花模様やさまざまな『アグレマン(飾り)』が施されている。首周りは、レースやリボン衿または首飾りで飾られている。ローブの深い衿ぐりにはシュミーズのフリルをのぞかせることが多く、これがルイ 15 世、ルイ 16 世時代には優雅な衣装とされた」¹⁴⁾。

(3) 若い女性の服装

もう 1 人の若い女性の服装も、色は異なるが、同様のローブ・ヴォラント形式で、さらに夫人と同様に袖口等ファン・ダイク様式である。「イギリスのコードで普及していた『ファン・ダイク』様式は、袖、衿、袖口につけた装飾、スカラップ装飾が特徴であった」¹⁸⁾。

6.2.2 リヒテンシュタイン宮殿を庭園側から見る

手前には、地盤よりもやや高いテラスが、右手にはリヒテンシュタイン公が、召使の黒人少年からスナックを手取る様子が描かれている(図 3.11 参照)。その背景となる画面の中央部には、やや地盤が低い庭園には植樹

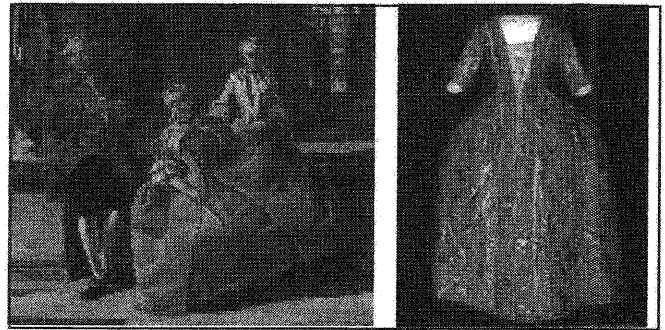


図 6.3 リヒテンシュタイン宮殿の前景(図 3.12 の部分)

右図：ローブ・ヴォラント、18 世紀半ば、ロココ調の典型的な装飾性を示す¹⁷⁾

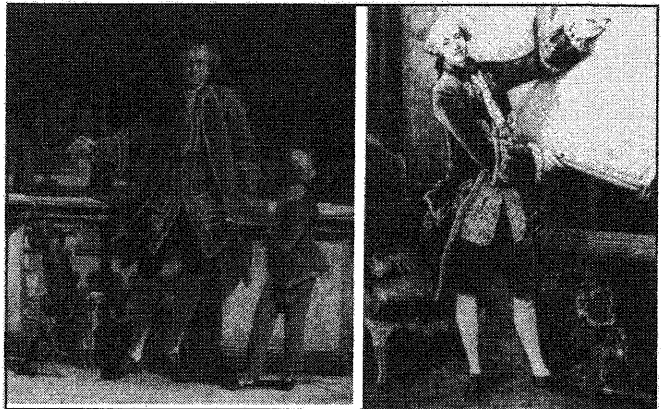


図 6.4 リヒテンシュタイン宮殿の右側の添景(図 3.11 の部分)

右図：余分の膨らみは縮小され・・・どの部分も統一され、アビ・ア・ラ・フランセーズ(フラックに近い)は、すっかりしてルイ 16 世の時代には洗練された。その後儀式用として宮殿のみで用いられる¹⁴⁾

とともに彫像が配されている。その先にはリヒテンシュタイン公の博物館が描かれている。また手前のテラスの階段の手すりにも、彫刻で飾られている。構図的には、芸術の愛好家らしい雰囲気でのリヒテンシュタイン公が、庭園と博物館を紹介しているように描かれた。

服装をみよう(図 6.4)。リヒテンシュタイン公のヴェストは、先のヴェストと色違いのダークグリーンであるが、デザインは同じで、衿ぐりから裾までゴールド糸の刺繍でデザインされている。外衣(ジストコール)もダークグリーンでヴェストと同じようにゴールド糸で刺繍されている。

6.3 シュロスホーフのオイゲン公子

シュロスホーフは、かつてオイゲン公子の夏の離宮であった。ベロットが描いた時には、オイゲン公子は亡くなっており(1663 - 1736)、シュロスホーフはマリア・テレジアの所有となっていた。そのテレジアの依頼でシュロスホーフの景観をベロットは描いたのである。オイゲン公子は、数々の功績によってハプスブルク家を救った大恩人であった。マリア・テレジアのこのような意図を汲んで、オイゲン公子の肖像画的風景として描いたと推定しておいた(図 3.13)。オイゲン公子の肖像画(1715 年肖像画家のヨハン・クペツキー作¹⁹⁾)と比較す

ると容貌の類似は、明らかである。背後には、シュロスホーフの宮殿の正面が見える。

(1) 男性の服装

服装をみると、頭には三角帽（トリコヌル）、ハイネックジャコ、ヴェスト、ジストコール、脚部はキュロット、ロングブーツである（図 6.5 参照）。1600 年代後半の竜騎兵連隊長時代の様子と推定しており、「黒い折り返し衿のついた赤い服を黄色いリボンで飾る」²⁴⁾。しかもオイゲン公子は当時、質素で飾り気がないといわれていた。「トリコヌルは、たいいてい黒フェルト製で、金銀の打



図 6.5 シュロスホーフに見る左側の人物（図 3.13 の部分）
右図：イギリス紳士、三角帽を手にしている。もともと三角帽は軍人用であった¹⁸⁾。

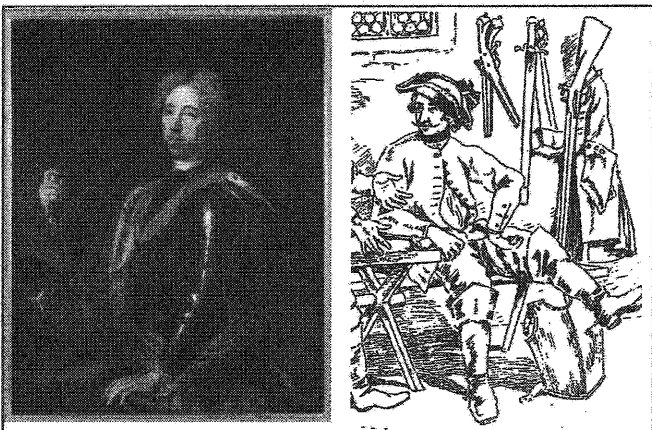


図 6.6 左図は、オイゲン公子の肖像画 1715 年¹⁹⁾
右図：兵舎でのドイツ兵士、袖付きの胴着を着ており、その上に羽織る表衣となる外套が壁（右）に架かっている²¹⁾。

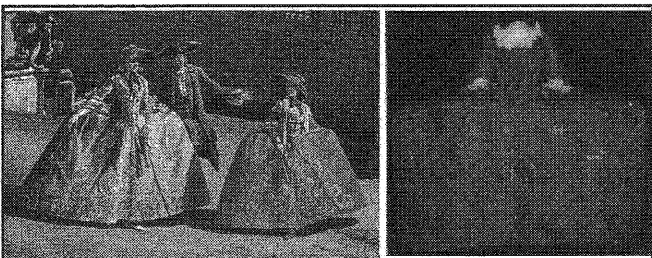


図 6.7 シュロスホーフを見る右側の添景（図 3.13 の部分図）
右図：宮廷服、1763 年ごろ、V&A、ローブ・ヴォラント形式の宮廷服。パニエが流行当初は、円錐形であったが、直径が広がるにつれて不便になり、1740 年ごろから前後の張り出しをなくし、横にだけ広がる形になった¹⁷⁾。

紐の縁飾りがついていた」。軍人の多くは、この型の帽子を用いた。「折り返し付きの長靴は、16 世紀の短靴に代わって現れた」（図 6.6 参照）²¹⁾。

(2) 女性の服装

右手には、3 人の男女が描かれている（図 6.7 参照）。2 人は宮廷衣装の女性である。

女性のパニエは、ゴールドカラーの「極端な横広がり」で、両側にほぼ直角に突き出ており、明らかに腰の両側で分離し、人工的で不格好な点が特徴であるが、・・・18 世紀末での宮廷衣装として着用された（図 6.7 の右図）¹⁷⁾。靴がわずかに見える。手には扇子を持ち、つばつき帽を身につけている。

つばのある帽子は、ドイツ、あるいはオーストリアのチロル地方で帯飾りをして幅広いつばのある帽子を着用するという。時代をさかのぼればさかのぼるほど、つばの幅は広くなる、という¹⁸⁾。またイギリスのゲインズボロが描いた肖像画「公園での語らい」（1750 年）には、つばのある帽子をかぶった夫人の姿が見える。

つばつきの帽子は、このようにヨーロッパで広く用いられたようだ。ただフランスで見られるさまざまなヘアスタイルが流行すれば、当然ながら帽子の使用は少なくなるという関連がある。

6.4 庭園内の添景

ヴェルベデーレの庭園（図 3.7）、シュロスホーフの庭園（図 3.14）に描きこまれた人物は、服装から判断して王侯貴族の盛装の男女の姿である。同時に、庭園を維持・管理している監督や職人の姿が描かれている。腹ばいになって芝や花を手入れしている職人、生垣を刈り込んで整形している職人、園路を水平に均している職人、現場の管理者に指示している貴族などである。

これらの添景の構図的な働きとしては、奥行き強調と一方ではシンプルな庭園の軸線を弱める働き、この両側面をもっていることがうかがえる。

6.5 添景は肖像画

宮殿の所有者を主景に配して、宮殿とともに描き、主人公の背景、立場を理解できるようにした。明らかに肖像画である。その服装を見ると、ハプスブルク帝国の王侯貴族がヨーロッパ各国の流行を取り入れており、当時のファッションの動向が把握できるように、ペロットはリアルに描きこんだ。

7. まとめ

(1) 景観タイプ：描かれた景観タイプは、市街地の全貌を見渡す景観、市街地の街並みの景観、宮殿の景観、の 3 タイプである。

(2) 定量指標：画角は、市街地の街並みの景観では 65 度、街の全貌を見渡す景観では 89 度、宮殿の景観では 84 度で広角で描かれた。仰角は、市街地の街並みの景観では

32度であり、宮殿の景観では7.5度である。

(3) 視点場相互の関連：遠景要素が、それぞれの庭園の視点場から宮殿とともに描かれた。リンク外にある宮殿と庭園が、リンク内の教会などと一体になった景観がえられた。これらの庭園は、単に宮殿の付属の庭園としてのみならず、リンク内の教会などを見る重要な視点場となった。視点場と視対象との視線を結び図上に表現すると、ウィーンの景観構造・骨格が明瞭に浮かび上がってくる。

(4) バロック様式の大庭園をもつ宮殿の構図：大庭園は、規模の大きいことにより、1枚の画面では表現しきれない。従って、建築設計製図の1点透視画法をベースに、しかも複数の視点場から画角を変えて1枚の絵画にまとめている。

(5) 添景について：カウニッツ宮殿の前のカウニッツ公、リヒテンシュタイン宮殿の前のリヒテンシュタイン公、それにシュロスホーフ宮殿の入り口に立つ人物は、いずれも、各宮殿の所有者であった。つまり、ペロットが描いたこれらの絵画は、パトロン肖像画の役割も兼ねていた。

以上要するにペロットは、实景に極めて近い3つの景観タイプを描き、そのために宮殿の景観では描写手法として1点透視画法を採用したこと、そして添景に描いた人物の服装に注目したとき、宮殿の制服姿もまたリアルに描いたことが明らかになり、貴族の生活感を表現している。

なお本論文は、科研（基盤（A）、19254003、代表：萩島哲）の成果の一部である。

参考文献及び注

- 1) Edgar Peters Bowron: Bernardo Bellotto and the Capitals of Europe, Electa Milano, 2001
- 2) Giandomenico Romanelli: Art Dossier- Bellotto, Giunti, 2001
- 3) Wilfried Seipel: Bernardo Bellotto genannt Canaletto, KHM, 2005
- 4) 平田達治：輪舞の都ウィーン，人文書院，1996

- 5) 坂井榮八郎：ヒストリカル・ガイドドイツ・オーストリア，山川出版社，1999
- 6) 菊池良生：神聖ローマ帝国，講談社現代新書，2003
- 7) 江村洋：ハプスブルク家，講談社現代新書，1990
- 8) 山之内克子：啓蒙都市ウィーン，山川出版社，2003
- 9) バーバラ・ジェラヴィッチ，矢田俊隆訳：近代オーストリアの歴史と文化，山川出版社，1994
- 10) エーリヒ・ツエルナー，リンツビヒラ裕美訳：オーストリア史，彩流社，2000
- 11) 岡崎文彬：図説ヨーロッパの庭と公園，養賢堂，1988
- 12) Rainer Herzog: Friedrich Ludwig von Sckell und Nymphenburg, Bayerische Schlosserverwaltung, 2003
- 13) Freimut Scholz: Schloss Nymphenburg, MPZ, 1994
- 14) 丹野郁：服飾の世界史，白水社，1985。フランス系の服装の事例が多い。
- 15) 青木英夫：西洋男子服流行史，源流社，1994
- 16) 青木英夫，大橋信一郎：メンズファッションの歴史，源流社，1979
- 17) 丹野郁：服飾の世界史，資料編，白水社，1985
- 18) フランソワ・ブーシュ：西洋服装史，文化出版局，1973。イギリス系の服装の事例が多い。
- 19) Marchfeldschlosser Revitalisierung: The Imperial Festival Palace HOF, 2005
- 20) 丹野郁監修：世界の民族衣装の事典，東京堂出版，2006
- 21) アドルフ・ローゼンベルク，飯塚信雄監修：図説服装の歴史（上）（下），図書刊行会，2001。ドイツ系の服装の事例が多い。
- 22) L. アルムブルスター，C. ツエーリック編：大ハプスブルク帝国—その光と影—，南窓社，1994，「19世紀オーストリア宮廷の制服とモード」pp. 52-68
- 23) Bayerische Schlosserverwaltung: Hubertussaal und Orangeriesaal im Nordflügel von Schloss Nymphenburg, 2003
- 24) 飯塚信雄：バロックの騎士，平凡社，1989

（受理：平成21年12月3日）